

中世文学を彩った人たち (1)



北畠 顕家

「～尊氏が怖れた南朝の若き武将～」



岡崎 嘉彦

北畠顕家 (1318～1338) は南北朝時代の公卿、武将。従一位大納言准大臣北畠親房の長男として生まれる。父の親房は後醍醐天皇に近侍し、公家政治の再興を計ろうとする建武の新政 (中興) を補佐していた。元弘三 (1333) 年、顕家は従三位に叙され陸奥守を任官し、父と共に陸奥国多賀城に下向し、東北地方を治める。同年には従二位に叙任される。建武二 (1335) 年、建武の新政に不満を抱いた足利尊氏が後醍醐天皇に反旗を翻したため、顕家は鎮守府将軍に任じられ、新田義貞や楠木正成らと共に尊氏を討伐する。敗れた尊氏は九州へと落ち延び再起を計る。三月には権中納言に任官し、奥州の足利方を掃討するため帰還する。その後、国府を靈山の地に移し陸奥国を治める。しかし尊氏が九州で再び勢力を挽回し、畿内へと兵を進めると、楠木軍らを打ち破り忽ち京を陥れる。後醍醐天皇は顕家に再三の出兵を求めるが、陸奥の安定もままならない顕家は即座に応じることが出来なかった。しかし、建武五 (1338) 年、ついに勅命を受け入れ奥州十万余騎をもって、後醍醐天皇の皇子義良親王を奉じ、靈山を出立西上する。緒戦で鎌倉を攻略するが、美濃国青野原の戦いでは足利方に勝利はしたものの、多くの兵を失うこととなり、その後は伊賀国や和泉国を転戦して激戦を繰り返すが、遂に全軍は潰走する。顕家は建武の新政を諫める奏上文を認め、七日後、石津浜 (石津の戦い) で戦死する。僅か二十一歳の若さであった。

北畠顕家は南北朝時代を舞台にした軍記物語である『太平記』に登場する人物である。顕家は後醍醐天皇の側近である親房の長男として、生まれた頃より将来を嘱望視され、朝廷への忠誠を尽くすよう育てられていく。そうした環境のもとで彼は、幼い頃から学問や兵法を学び優

れた才能を見せ始める。顕家が十三歳の時には若くして左中弁の地位に就くという新例を開き、同年には後醍醐天皇の北山行幸に供奉し、その際に華麗な舞い姿を披露するなど、学問だけではなく舞踊や芸術にも精通していたことが伺える。その学才を見込まれた顕家は十六歳の時に陸奥守に任じられたことで、運命を大きく変えていく。大きな力を持った顕家は後醍醐天皇から度々の出陣命令を受け、遠く奥州より幾度となく出兵していく。だが、次第に彼ら南朝方の武将は厳しい立場へと追込まれていき、自らも窮地に陥り、最期を覚悟する。

そうした中で彼が記した諫奏文は、厳しい言葉で綴られており、後醍醐天皇のもとで父達が推し進めていた建武の新政の欠点を指摘していた。また、今後の政治の在り方や改善点についてまでも示したものであった。そこからは、まだ若い彼の強い正義感が垣間見える。後醍醐天皇に対し、その体制を改める提言ができた人物は少なかった時代に、敬意を表しながらも忌憚のない意見を奏上した顕家は勇氣と優秀な政治力を兼ね備えていた存在であった。

その若さで奥州を纏め上げる使命を受け、南朝のために尽力し、一心不乱に戦い抜いた顕家。彼には、天性の才能とこの動乱の世において自らが信じた道を果敢に突き進んでいく勇敢さがあった。若くして散った彼だったが、多くの人々から尊敬され、『太平記』にその名を高くとどめている。彼が望んでいた人々の生活、そしてその未来はどのようなものであったのだろうか。

■主な参考文献、そして今回お薦めする本

『太平記の世界：変革の時代を読む』
永積安明 [ほか] 著 日本放送出版協会
1987年。913.435-Nag

おかざき よしひこ (司書・係・情報サービス課)